

D. H. Lawrence 研究

The Man Who Died について

阿 部 喜 代 美*

(1978年3月20日受理)

D. H. Lawrence (1885-1930) の最後の作品ともいえる *The Man Who Died* (1928) は美しい作品である。早春の朝早く墓の中で目覚めた男、死んだ男としてしか表現されていないが、イエス・キリストの孤独は、いたいたしく、美しく心をうつ。人に愛のみを与えただけなのに、その報いとして十字架にかけられてしまった男の悲しさ、侘しさ、寂しさが、早春の野を歩む男の身体全体から滲み出てくる。それは、あたかも、D. H. Lawrence という一人の男が生涯をかけて、人間の愛について追求し、書き続けたにもかかわらず、世間からは受け入れられなかった。そして、死の宣告を受け、死の床にありながらも、なおかつ、人間の救いを書き続けずにはいられなかった姿とオーバラップする時、その美しさ、哀しさは二重の意味をもって胸にせまってくる。*The Man Who Died* は、あらゆる意味で、彼の全生涯、全作品の総決算とも言える書である。

一般には、性の探求者としての面のみが、マスコミにおいては取り沙汰されるが、彼の45年に渡る生涯において書かれた、おびただしい、長編小説、短編小説、詩、紀行文、エッセイ、歴史書を考察するならば、ロレンスは、一人の偉大なる文学者であると同時に偉大なる思想家、又、予言者であったことを認めないわけにはいかないであろう。その生涯は、「神の死」が言われる時代であって、ひたすら神の復活を求め続けた一生であった。そうした彼は死を前にして、キリストの復活物語を書かねばならなかった。それは必然的なものであったのである。

David Herbert Richard Lawrence は England の中部 Nottingham の炭坑町 Eastwood の Victoria Street で1885年9月11日、父 Arthur John Lawrence と母 Lydia Beardsall の三男として生まれる。父方の祖父 John Lawrence はフランス人で、Nottingham のレース製造業者の娘と結婚し、洋服商を営んでいた。父は炭坑請負師で配下に、三、四人の坑夫を使っていた。父が炭坑夫、一労働者であったということはあまり

* 英文学研究室

にも有名であるが、ロレンスの家系では、プロレタリアの労働者となったのは、この父が初めてであった。彼は赤ら顔の、黒い輝く目と、自慢の黒いあごひげを生やした、陽気な逞しい男であった。良い声をしていて、数年 Brinsley Church の聖歌隊の一員でもあった。Harry T. Moore は、後に展開されるロレンスの darkness の世界の原点を、この父の働いた炭坑の深くて暗い地下の世界に求めている。⁽¹⁾

母 Lydia はかつて小学校の教師をしたこともある知的な女性で、なによりも教育ある男と宗教や哲学や政治について議論を闘わすのが好きだった。二人の出会いは Arthur の叔母 Alice と、Lydia の叔父 John が結婚して過ごしている家庭においてであった。

母方は、すでに没落していたが Nottingham の名門であり、ロレンスの曾祖父 John Newton (1802-1886) は、今日でも英国で歌われている有名な讃美歌 "Sovereignty" の作者であり、祖父 George Beardsall は造船技師で、予言者的な、伝道に熱心な、信仰の厚い人で、救世軍の創始者 William Booth とも親交のあった人である。

Harry T. Moore が、

These three men, the collier father and the hymn-writing and hymn-singing grandfathers, should be remembered as standing behind Lawrence ancestrally.⁽²⁾

と述べているように、ロレンスは、非常に宗教的な雰囲気の中で育ち、エッセイ "Hymns in a Man's Life"⁽³⁾ で述べているように、子供時代 Eastwood の Congregational Chapel で歌った讃美歌は、一生彼に深い影響を与え続けたのであった。

1914年 Edward Garnett にあてた手紙で、

But primarily I am a passionately religious man, and my novels must be written from the depth of my religious experience. That I must keep to, because I can only work like that.⁽⁴⁾

と宣言しているように、彼の生涯、彼の作品は、極めて Puritan 的な、求道者的なもので、つらぬかれているのである。が、しかし、彼の宗教は、決して既成の教会信仰の内にとどまりうるものではなかった。

今や今世紀の最も優れた古典の一つに数えられる長編小説 *Sons and Lovers* (1913) は、自伝的要素の強い作品で、ロレンスの抱える数々の問題点の萌芽を見てとることができる。

教養ある知的な女性が燃える肉体を持つ労働者の男と結婚するが挫折し、その代償に息子達を恋人にする。息子 Paul は精神的な母親の影響を強く受けて育つが、同時に、遅い身体を持ち、なによりも体を動かすことに喜びを見出し、大地の奥深い炭坑で働く父の血も引いている。Paul の内で、父と母の血が葛藤する。父と母との代では、精神的な母の勝利に終るのではあるが、Paul は、精神的で、ヴィクトリア朝的道德観、肉体蔑視のキリスト教に生きる恋人 Miriam に、「あなたは尼である。」という言葉を残して、別れるのである。そして、反動的に Crala という人妻と関係を持つが、彼女との関係は、単に肉体的なつながりのみで、やはり Paul の望みうる関係にはなり得ない。こうして、父と母の息子であり、二人の恋人 Miriam と Crala との恋愛を卒業した彼は肉体と精神のバランスのとれた wholeness を求めて、さまよい出るところでこの作品は終る。

この作品を通して、若い頃のロレンスがいかにか、精神と肉体の相剋に悩み、あまりにも精神的になりすぎてしまっていた当時のキリスト教に不信を持つに至ったことを見てとることができる。1911年4月妹 Ada にあてた手紙には、次のようである。

However, it seems to me like this: Jehovah is the Jew's idea of God, not ours. Christ was infinitely good, but mortal as we. There still remains a God, but not a personal God... What does it matter the name we cry? It is a fine thing to establish one's own religion in one's heart, not to be dependent on tradition and second-hand ideals. (5)

この頃、教会には気がむくとかよってはいたようではあるが、すでに既成のキリスト教には、あきたらず、真実に訴える神を求めていたことは明らかである。

ロレンスは、神を求めて世界中を放浪する。彼は、非常に感性の豊かな鋭い人で、その土地その国民の持つ靈魂に鋭敏な反応を示し、強く影響を受けている。1912年

より13年にかけて、旧師 Ernest Weekley の妻 Frieda、後に正式に結婚、とイギリスをのがれ、初めてイタリアを訪れた時の体験をもとに書かれた、旅行記 *Twilight in Italy* (1916) において、イタリアの地に古代異教の残影に初めて出会った強烈な印象を見てとることができる。

中世ヨーロッパにおいて人は、衝動的で、原始的で、動物的な性格から抜け出、自己犠牲へと、抽象的なキリスト教へと向った。そこにおいては、一つの成就があり、一つの喜びがあった。人はキリスト教なしに混沌から、希望なき暗黒の時代から抜け出すことはできななかった。が、運動は常に一つの方向性をとる。キリスト教は肉なるものを排除し、より抽象的になり、肉体の牢獄からより自由になることを望んだ。ヨーロッパは完全にキリスト教の社会となったが、運動は一つの行きづまりまで行き挫折せざるをえなかった。それが、頂度ルネッサンスという形をとったのである。

ルネッサンス以降、北方系のヨーロッパ人は、キリスト教をさらに先へ進み、そして南方系ヨーロッパ・イタリア人は、父なる神信仰へひき返したのである。

父なる神信仰とは、「父なる神は、神御自身の姿に似せて、人間を肉なるものとして創造された。」という一点に立つものである。それは肉体のエクスタシーを通して、永遠の炎に変容する道であり、神と一つになる道である。全ては個の五感を通してのみ成就するという。ゆえに、“the I” が絶対であり、全てであり、イタリア人はこの道を選んだが、この道は肉の存在たる人間の限界を越えることはできない。

それに対して、子なる神、キリスト信仰は「自分自身を愛するように隣人を愛する」という一点にたつものであり、自分自身でない他者のうちに神は存在する。ロレンスはこの神を“Not Me”と呼ぶ。他者を愛することは、他者を知ることであり、それは抽象的人間観に生きる道である。自分自身ではない神を信仰することは、神の姿であり、肉の存在である自分自身を否定することになる。そして、それは確かに、意識の領域において、肉体に限定された人間存在を遥かに越えてはいくものである。人は全てを知り、祝福され、自由になるが、同時に、自己の外なるものを分析していく科学の精神であり、その行きつくところは機械信仰で、“Not Me”の神とは、全て一様に働く思いやりのない神となる。

ロレンスは、全てを二元的なものにとらえる。父なる神と子なる神、暗黒と光、感覚と理性、私と無私、鷲と鳩、トラと羊。神への道はこの二元性を全うすることによって成し遂げられる。個の五感を通して、人間の深淵にある暗黒の内にて創造の神と一つになること。そして

又個の肉体を越えたところで、精神の内に究極なる神と一つになること。上昇と下降の内に神と一つになる。二つは決して一つにはならない。つねに対立し、しかも互に関係して存在する。そしてこの二つを関係づけるのが、聖霊であり、そして彼は聖霊の内にあってこの二つの道、二つの無限、二つの成就を知るといふ。

この旅行記において、ロレンスの宗教観は、キリスト教の三位一体論を借りて展開されるが、その認識の仕方は、明らかに、正統キリスト教とは異なるものである。

キリスト信仰、子なる神信仰については、キリスト教に即しているが、父なる神信仰について言えば、かなり異教的色彩が濃い。そして、もう一つ、特徴的なものは二元的なものの見方である。それは、聖書に書かれているような「光はやみの中に輝いている。そしてやみはこれに勝たなかった。」的なキリスト教的善悪の世界、どちらか一方を完全に否定するものの見方とは全く異なるものである。彼にあっては、常に二つが緊張関係のうちに、バランスをとりあって存在しあうことによって、両者をひくくめる存在の内に、一つの完成の姿を見るのである。

The idea of dividing the Power Beyond into two, one good and one devil, belongs to an advanced and sophisticated religion. In the more primitive cults the deity is in himself the author of all, whether good or bad.⁽⁶⁾

という、Margaret A. Murray (1863-1963) の言葉を待つまでもなく、二つの対立する要素を一つの内に包含していく考え方は、キリスト教以外の宗教感覚に他ならず、ロレンスの内には、こうした異教的感覚が、初期においてより、かなり濃かったことがうかがえるのである。

それでは、そうした異教的感覚は、何処にその根を持ち、いかに育まれたものであろうか。上記の Murray は、イギリスにおける土着の神々とキリスト教の関係について、文化人類学上の立場から、*The God of Witches* (1931) に次のように書いている。

キリスト教が初めてイギリスに入ってきたのは、西からであり、当時は支配階級というよりも、むしろ庶民の間に宣教がなされた。それより数世紀後、今度は東海岸より、別の宣教団が入ってきた。その頃になると、教会はより組織化され、ドグマ化され、より伝道に熱心であったので、その宣教目標は、庶民よりも、支配階級、王族に集中した。しかしながら土着の宗教はその間、ヨーロッパ土着の神々を信ずる種々の民族の侵入の中に絶えず補強されていった。

こうした傾向は、カヌート王の改宗により顕著にみられる。彼は自分の新しい宗教、に熱心で、法によって土着の神を抑圧したという。しかし幾世紀にも渡って、種々のヨーロッパの神々が混じり合い土着していった異教の歴史は、少数の移住キリスト教徒、宣教団によって、簡単に変わるということではなく、イギリスは、キリスト教信者の支配者と貴族、そして異教徒の国民というふうに分断されてしまった。

最終征服はノルマン人によってなされたものではあったが、ノルマン人も、イギリスと同じく王はキリスト教徒であったが、多くは古い神を信じ、この二つの宗教の関係をたいして変えることはなく、教会の最も位の高い儀式においてすら、僧はしばしば、キリスト教の神と同様、異教の神に対しても礼拝をささげ、又、異教の儀式を行ったという。

この二つの宗教間の一線は、宗教改革によって、より明確になり、古い神々を信ずる宗教は、次第に下層階級へと格下げされ、又文明の中心から遠く離れた地域へと限られていった。

裁判記録で、教会側の最初の大勝利が記録されるのは、15世紀に入ってからであり、この世紀の終り頃になってようやくキリスト教の力は確立され、教会は古い神に対して組織的な攻激を開始する。16世紀、17世紀を通して、キリスト教と異教の闘いは荒れ狂い、初めは異教徒達が勝を占めたが、最終的には、支配階級、法制定者にその力を持つ教会の政治力が勝つこととなり、イギリスはキリスト教国となったという。

イギリス人・イコール・キリスト教徒と単純に考えがちな日本人、我々にとって、どうしても謎の部分であったロレンスのどこか違う宗教感覚を、こうした歴史の流れの中でもう一度とらえ直してみると、たしかに理解できてくるのである。ロレンスの体内を流れる血の中には、こうした長い歴史を持つ土着の神々が、たしかに脈打っていたのである。そして一時期においては、キリスト教が、彼らイギリス人を救った時代もあったが、19世紀後半から20世紀において、一つの行き詰った時代に生きた彼は、自らの血の感ずる宗教に生きてみようとする。ロレンスは、イタリアの地に於て、ルネッサンス以降「父なる神」信仰に生きるイタリア人のうちに、古代異教の神 pre-Christ の神の存在を感じとり、古代異教の神に肉なる世界の復権の足がかりを得たといえよう。そして彼は、その後の彼の思想の基盤となる blood-knowledge を確立するのである。1913年1月17日イタリアの地より Ernest Collings にあてた手紙には、次のように記してある。

My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect. We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true. The intellect is only a bit and a bridle. What do I care about knowledge. All I want is to answer to my blood, direct, without fribbling intervention of mind, or moral, or what-not. I conceive a man's body as a kind of flame, like a candle flame, forever upright and yet flowing; and the intellect is just the light that is shed on to the things around.⁽⁷⁾

Sons and Lovers において提起されたテーマ、精神と肉体の調和は、続いて書かれた *The Rainbow* (1915)、と *Women in Love* (1921) において、さらに追求される。ロレンスは *Women in Love* において、精神的な女の典型 Hermione を乗り越え、知的でありながら、なおかつ dark sensual な世界を知り得る Ursula を創造することに成功する。

“The point about love,” he said, his consciousness quickly adjusting itself, “is that we hate the word because we have vulgarised it. It ought to be prescribed, tabooed from utterance, for many years, till we get a new, better idea.”⁽⁸⁾

と、Birkin に語らせるように、この作品で、ロレンスは、一歩前進し、新しい、より本質的な愛を探求する。一般的に我々が愛と呼んでいるものは、他のあらゆるものと同様に情念の一種であり、人間関係の一部にすぎないものであり、環境に応じて、時に感じたり、感じなかったりする情緒にすぎない。愛の感情は最後には燃えつきてしまうものであり、愛は単に一分枝にすぎず、根は愛以上のものである。男女が出会う次元は、一種の赤裸々な孤独 (a naked kind of isolation)、孤立する自己 (an isolated me)、愛の力の及ばない最終的に残留する (a final me which is stark)、非個人的 (impersonal) な自己における出会いでなければならない。人は、情熱の深みに達した時、非個人的になり、非感情的 (unemotional) になり、まったく無関心 (indifferent) に落ちこむ。そういう情熱がある。太古においては性は、いまだ分離せず、男女は相互に混淆した存在であったが、やがて孤立化の過程は性の両極化を生み、完結した分離において、男は純粋な男となり、女は純粋な女となり、両性が完全に両極化され、純粋な自由を保持して

出会う freedom-together の状態こそ、孤独な二つの存在の完全なバランス、星がおたがいに均衡を保っているような関係 (an equilibrium, a pure balance of two single beings, as the stars balance each other) こそ男と女の関係でなければならないと説く。

Ursula と Birkin の出会いは、言葉の世界ではなく、頭で得られない暗黒の知識 (the great dark knowledge) つまり、blood-knowledge による出会いであり、二人は、深い根源的な絆によって結ばれるのだが、この作品においては、二人の交りの成就是瞬時的なもので、Ursula は一つの体験としてのみ経験し、新しい愛のあり方を認識するまでには至らないのである。この新しい愛のあり方は、さらに追求され、後に *Lady Chatterley's Lover* (1928) の Constance, *The Man Who Died* の Isis に仕える女によって完成するのである。

第一次世界大戦中は、ロレンスにとって最も暗い時代であった。心身共に疲れ切った彼は、1922年2月、*Osterley* 号にて、ヨーロッパを後に、セイロンに向って旅立つ。その時の心境を、Catherine Carswell あての手紙では、次のように語っている。

I think one must for the moment withdraw from the world, away towards the inner realities that are real: and return, maybe, to the world, later when one is quiet and sure. I am tired of the world, and want the peace like a river: not this whisky and soda, bad whisky, too, of life so-called. I don't believe in Buddhistic inaction and meditation. But I believe the Buddhistic peace is the point to start from - not our strident fretting and squabbling.⁽⁹⁾

ヨーロッパにおける教会は、すでにほとんど死にかかっている。1883年 Nietzsche (1844-1900) によって「我々が神を殺してしまったのだ」と宣告を受けている。彼に確信と平安を与える神はいない。それゆえに彼は旅に出なければならなかった。彼にとっては、神の存在は自明の理であった。そして宗教とは一つの経験、それは人間の理性でコントロールできるようなものではなく、まさに五感の最も奥深いところで体験する、言葉では説明できない、測りがたい体験そのものであった。彼はイギリスを初めとし、ヨーロッパを巡り歩いたが、しかし、もはやヨーロッパにおいて、生きた神々と、そのような生きた交流をなし得ないならやはり、旅に出るより

仕方がなかった。この地上のどこかに、いまだ生きているはずの神々と出会わなければならない。

彼はセイロンに向って旅立った。“the Buddhistic peace is the point to start from” しかしセイロンに来てみると仏教徒達は、単に野蛮であり、仏教の高踏性は全く机上のものとしか思えない。魂の否定、それは哲学的に可能であっても、現実には常に仏教を不毛なものとしてしまっている。

同年4月24日、彼はさらにオーストラリアへと船出する。しかし、オーストラリアも又、彼の求める地ではなかった。オーストラリアは500年経ってから、生まれてくる魂の住む国のように思えたという。

ロレンスが、砂漠とアメリカンインディアンの国、ニューメキシコのサンタ・フェに着いたのは、同年9月10日、彼の37歳の誕生日の前夜であった。そしてこの地こそ、彼の求め続けていた地であったのである。彼はサンタ・フェで初めての朝をむかえた時、ただちにこの地の持つ不思議な力を感じるのであった。太古の姿のままの砂漠から、光り輝く、誇らしい朝日が昇ってくるのを見た瞬間、彼の魂の中で、何かが立ちどまったという。そして、荘厳などう猛なまでのニューメキシコの朝に、彼の魂の新しい一部が突如として目覚め、それまで彼が良く知っていた古い世界は消失していき、新しい世界が開けて来るのであった。そして、彼は、その世界に生き始める。

彼はサンタ・フェの北、ロッキー山脈のふもと、人口2000人そこそこの Taos、そこからさらに上った the Sangre de Christo 山の中の牧場に到着。牧場の背後にはロッキー山脈が、ぐるりは丘で、松、杉、アカザのやぶが茂り、遥かに見おろす一帯は、アリゾナまで続く、見渡す限りの砂漠。そして玉髓のように青いテーブル形の山・メサが点在する。砂漠をさらに行く、リオ・グランデ峡谷が下に広がり、時に砂漠を竜巻が横切っていく。そして、その砂漠のかなたには、山また山が灰青色にかすんで重なってみえる。

ここ Kiowa Ranch は、まったく人里離れたところで、その雄大な自然は太古のまま、まったく人にふれられないまま eagle-like royalty の内に静まりかえる。そして、木と、山と、しまりすと、砂漠とだけ暮らしていると、空気の中から何か野生的な手なづけられない冷酷で、誇らしい、美しく、邪悪ですらあるものが吸みとれるのであった。こうした全くの静けさの内でもかえる朝は、彼が、今まで経験したことのない完璧なまでの美しさで、彼が生きたどの地よりも、彼に最大の影響を与える。

彼は牧場から、Taos のプエブロインディアン、ホピ族、ナバホ族、アパッチ族の部落を訪ずれる。そして、彼の内に太古から生き続けてきた生命力あふれる原始宗

教にふれるのである。これこそ、彼の究極の存在に力を与える彼の求め続けてきた宗教に他ならなかった。彼にとっては、アメリカンインディアンは、ギリシャ人よりも、ヒンズー教徒よりも、いかなるヨーロッパ人よりも、エジプト人よりも古い民族で、この地球上で生きている民族の中で、最も古い、深い宗教感覚を持った民族のように思えた。シシリーのカソリック、セイロンのヒンズーと、いわゆる古い正統派宗教によって得ることのできなかった、生きた宗教、それまでの彼の全存在をつき崩した、生きた宗教との出会いは、思いもかけず、ヨーロッパから、はるか離れたニューメキシコの地にて、遂に成し得たのであった。彼は第二の啓示を受ける。エッセイ “New Mexico” (1928) に、次のように記されてある。

インディアンの宗教は、広漠たる (vast)、古い (old) 宗教であり、我々の知るいかなる宗教よりも偉大 (great) で全き (stark) ものであり、ありのままの姿 (naked) をした宗教である。いかなる神もおらず、神概念もなく、全てが神である。しかし、西欧において良く知られている凡神論とは異なるものである。

最も古き宗教においては、全ては生きているのである。超自然的に生きているというのではなく、ごく自然に生きている。そして、あるのはただ深い、より深い生命の流れであり、より広く、より広く広がっていく生命の震動である。そして人間の人生における全努力は、コスモスの本質的生命、山の生命、雲の生命、雷の生命、空気の生命、地の生命、太陽の生命にふれることにより、その生命を得ることであった。そしてこれらの生命と直接的にふれることにより、活力を、力を、暗黒の喜びを引き出すのである。

偶像もなく、象徴もなく、精神的なものすらない。これこそ広漠たる純粋な宗教である。それは特定の神、救世主、組織へと分化する以前の、最も古い、全人類に共通のコスモス宗教である。それゆえに、それはいかなる宗教よりも偉大である。

そうしたインディアン達の中に生き続けている古代宗教と出会うのは、ほんの瞬時であったが、ロレンスの血は一瞬のうちに、そうした全てを悟ったのである。ロレンスにとっては、それが第二の天啓となるのに充分であったと言う。

ロレンスのニューメキシコ滞在は、一時ヨーロッパに帰国するが1925年まで続く。そして、この牧場を中心に、メキシコまで数回足を伸ばすのであった。

この頃のロレンスは、エッセイ “Books” (1936)、や “On Human Destiny” (1924) で、盛んに、新しい宗教を見出す努力をせよと我々に語りかけている。

I know the greatness of Christianity: it is a past greatness. I know that, but for those early Christians, we should never have emerged from the chaos and hopeless disaster of the Dark Ages. If I had lived in the year 400, pray God, I should have been a true and passionate Christian. The adventurer.

But now I live in 1924, and the Christian venture is done. The adventure is gone out of Christianity. We must start on a new venture towards God. "Books"⁽¹⁰⁾

So it was in Roman times. The great old pagan fire of knowledge gradually died, its sources dried up. Then Jesus started a new, strange little flicker. Today, the long light Christianity is guttering to go out and we have to get at new resources in ourselves. "On Human Destiny"⁽¹¹⁾

そして、メキシコを舞台とした長編小説 *The Plumed Serpent* (1926) では、キリストを葬り、メキシコ土着の神 Quetzalcoatl を復活させることを試みるが、決して成功したとは言えない。

1925年5月、17歳の時肺炎にかかり、それ以後決して健康であったとは言えなかったロレンスであったが、メキシコシティにて、医者より肺結核第三期、余命1、2年の宣告を受けてしまった。ロレンスは、こよなく愛したニューメキシコの地を去り、ヨーロッパに帰らざるを得なかった。しかし、イギリスに帰ることはなくヨーロッパを転々とし、1926年5月より1928年6月までフィレンツェの郊外の Villa Miranda に落ちつく。Earl Bluster と Etruria を訪れたのは、1927年3月より4月にかけてであった。

Etruria とは、今では滅亡してしまっているが、ローマ人に滅ぼされるまでは、B.C. 9C 頃より、イタリアの地中海中、西部において栄えた一民族であり、B.C. 7C から、B.C. 6C にかけては、イタリア半島をその支配下におくほどの勢力を持った民族であった。彼らは、商業、農業、金属技術工芸に従事し、その生活は宗教を基盤としていた。彼らの宗教は気象といけにえの動物の内臓からなる占を通して司祭が信託を告げる宗教であったようである。エトルリア文字はいまだ解読されていないので、彼らについて知るには、点在する墳墓とその出土品にたよる他はない。

ロレンスはペルーシアの博物館でエトルリアの出土品を初めて見た時、本能的に、エトルリアにひと目惚れし

たと書いている。1921年10月25日付の Catherine Carswell への手紙に、

Also will you tell me what then was the secret of the Etruscans, which you saw written so plainly in the place you went to? Please don't forget to tell me, as they really do rather puzzle me, the Etruscans.⁽¹²⁾

とあるように、かなり前からエトルリアに興味を持っていたことはうかがえる。

エトルリアの墳墓を巡り歩きながら、ロレンスは、エトルリア人の中に、生命への深い信頼と、肯定、全身全霊を持って宗教を肌と感じ、神に触れて生きていた彼らの姿を見るのであった。

Lawrence saw the Etruscan as he saw the American Indian: ... Lawrence reads into Etruria the mystery religion, with its rites of death and rebirth, its esoteric caste of initiates. That he was also to discover, hidden under Jewish and Christian sophistications, in the text of the Book of Revelation... The myth of aristocratic, secret-sacred knowledge, earlier associated with the American Indians, is now figured forth by the ancient mystery religion, universal in a pre-glacial, prelapsarian world, a world before the collapse into mentalism.⁽¹³⁾

と、Frank Kermode が指摘するように、エトルリアでロレンスは、pre-Christian-Europe との出会いを体験するのであった。そして *The Man Who Died* 執筆を思いつくのは、まさに、ここエトルリアでむかえた復活祭の朝のことであった。Earl Bluster は、その時の状況を次のように述べている。

My memory is that Easter morning (Palm Sunday, 10 April 1927) found us at Grosseto (Volterra): there we passed a little shop, in the window of which was a toy white rooster escaping from an egg. I remarked that it suggested a title - "The Escaped Cock - a story of the Resurrection."

Lawrence replied that he had been thinking about writing a story of the Resurrection: later in the book of that title which he gave me, he has written: "To Earl this story, that began in

Volterra, when we were there together.”⁽¹⁴⁾

ニューメキシコで古代より生き続けている 神体験をし、エトルリアでさらに深く交り明確化された古代異教の神々との出会いの体験を、キリストの復活へと昇華させた物語を書くことが、死を前にして、人生の総決算として、いまや彼に残された最大の最後の仕事となったと言える。ヨーロッパへもどった最後の5年間には、宗教的な作品が目立って多く書かれている。*The Man Who Died* と共に注目すべき作品 *Apocalypse* (1931)、数々のエッセイ、短篇小説、詩等。

The Man Who Died は初め *The Escaped Cock* というタイトルで一部のみ、アメリカの雑誌 *Forum* に1928年2月発表された。二部は同年8月に一步遅れて完成し、一部、二部あわせて、1929年9月 Paris の *The Black Sun Press* より出版される。普及版450部、特装版50部であった。*The Man Who Died* という題に新ためられたのは、1931年3月イギリス版初版 London の *Martin Secker* より出版されたものからである。9頁に Note として、“The original title of this story was *The Escaped Cock*. The present title was decided upon by the author shortly before his death.” とある。この時の初版印刷は2,000部、同社は同年9月、翌1932年11月続けて、reprint 版を出している。続いて *Heinemann* 社が1935年イラスト入を2,000部、さらにポケット版を出版。アメリカにおける初版は1931年 *Alfred Knopf* よりであった。⁽¹⁵⁾

夜明けのイェルサレムの墓の中で一人の男が長い眠りから目覚めた。彼は無意識の底に沈み、死の冷やかな虚無に全てをゆだねて眠り続けていたかった。しかし目覚めてしまった彼であった。今や一度十字架につけられ、死んだ男の体内には、永遠に死を知らぬこの世にあって、完全な幻滅感からくる途方もない空虚さと、深い非常に深い吐き気がうずいていた。

そして農家の裏庭で、太陽の光を浴びながら傷を癒す彼は一生輝くことのない農夫を見ながら呟く。土くれを高めようとしたのは私のあやまりだった。干渉したのは私のあやまりだったと。

三日目の朝、墓の前でマグダラのマリアに会った彼は、師としての、救世主としての自分は死んだ。救世主としての自分の生活は干渉の生活であり、傲慢なものであった。あのような生活が必要であったが、終わったことをうれしく思う。これからは一人の個人として生きてゆ

きたいと語る。

彼は弟子達のところへ戻ることを拒否し、農夫のところで傷を癒すことに専念する。そして、死から甦ってひとつの発見をした。

Risen from the dead, he had realised at last that the body, too, has its little life, and beyond that, the greater life... Now he know that he had risen for the woman, or women, who knew the greater life of the body, not greedy to give, not greedy to take, and with whom he could mingle his body.⁽¹⁶⁾

彼は墓の中で自我を捨て去っていた。今、彼はあせりも煩悶もなく生き、一種の不死に他ならない純粋な孤独の中で、今まで、この世の現実を本当に生きたことのない自分を意識する。

医者になる決意をし、農家から旅に出た彼は、道行く人々を見ながら、又も思うのだった。生は様々な泡をふくのに、なぜ自分は生が一様に泡立つことを望んだのだろうか。自分の生き方はあやまっていた。

夕闇の中で、かつての彼の弟子達に会った彼は、彼らの中に隣人に孤独でいる権利を与えない狭量な信者の姿を見た。

彼は、かかわりと誘惑の無限の交錯にすぎない現実の中に、さらに深く踏み入るために、旅をつづける。

男はレバノンの山すそで、女神アイシスに仕える女に出会う。彼女の父はアントニイの友人で軍人であった。彼女は、シーザー、アントニイを知っていたが、そうした冷酷な冬の太陽、これ見よがしな真夏の太陽に花ひらくことはなかった。老哲学者は、彼女に、まれには、死んで甦った男を待つ女もいる。蓮の花が、暗中の董のような太陽の光に、蕾みずからを開くように、甦った男を待つように悟した。そして彼女は、エジプトのアイシスの女神を見出し、この女神の運命のうちに、自らの神祕を封じ込め、オサイリスを待っていた。

アイシスの聖堂で、アイシスの女と会った彼は、優しい女のクロッカスのような身にひそんでいる治癒力と恵に驚くのだった。彼にとっては、女の優しさは、彼の経験した死よりも恐ろしく、美しいものに思えた。十字架の死に自らをゆだねた彼だったが、優しい生命の触れあいに身をゆだねることは、それにもまして苦しいもののように思えた。それは、死の場合よりも、もっと赤裸に身をさらさねばならないからだった。そして、アイシスの女との優しい触れあいの中から、すべての事があきらかになってきた。

Suddenly it dawned on him: I asked them all to serve me with the corpse of their love. And in the end I offered them only the corpse of my love. (17)

そして、彼の心には接触のうちのみ存在する、暖かく、柔らかな愛、歓喜にみちた愛が次第にはっきりとしてきた。そして自らの生を、豊かな生命の柔らかな白い岩である女のうえに打ち建てるべきことを知った。そして、彼は、アイシスの女によって完全に甦るのであった。日がたち、ついに触れあいは完成し、成就された。女には新しい生命が宿る。しかし、その頃、ローマの手はここまで伸び、男は再会を約して、小舟で去っていくのである。

So let the boat carry me. Tomorrow is another day. (18)

こうして、この物語は、死んだ男—イエス・キリスト—が、公の生活を否定するところから始まる。当然これは、キリスト教徒にとっては、非常に衝撃的な作品であり、敬虔なキリスト教徒達から、非難をあびたであろうことは、想像に難くない。一部が、アメリカの *Fourm* に掲載された時の、一般読者の反応を、ロレンスは次のように、苦々しく語っている。

“Its a good story – very good. True and tender. But that didn’t prevent its reader from being shocked and from writing to the Editor to say his magazine wasn’t fit for their wives and daughters to read. Not fit to read! My lovely story. Oh, their dirty, mean, pocky little minds! There was quite an uproar and the Editor was frightened. He knew my story was good, but he wouldn’t stand by me because he was frightened for his wretched magazine.” Lawrence spoke with intense bitterness. (19)

出版直後の書評をいくつかひろってみると、Paris の *The Black Sun Press* 初版本について、John M. Murry は *The Criterion* (1930) に次のように書いている。

The story is beautiful, with all the beauty of sorrow and seriousness.... We brush aside all talk of outrage, and declare that no writer, of history of fiction, has ever dealt more tenderly with the figure of Jesus than Lawrence has done here ;

the great love of Jesus cannot be mistaken.... As a parable, the story is lovely, tender, and profound.... *The Escaped Cock* is the swan-song of the greatest spirit of our time.

と、一応の評価はしているが、

Yet, this summary we give it with deceptive simplicity. Hidden beneath its seeming lucid surface is a contradiction and a conflict. For the resurrected Jesus is still Jesus, and not another....

This, which is to me the essential of the message of Jesus, I do not think Lawrence ever understood. (20)

との批判が、目につく。一時期、非常にロレンスとの親交の深かった彼ではあるが、正統キリスト教信仰を生存の基盤としている Murry にとっては、このキリスト神話は、肯定しうるものではない。

Secker 版に対する、*Time Literary Supplement* (1931) の書評も Murry の “Lawrence has never squarely faced Christianity or its founder.” を基準としたもので、

So far as Lawrence’s attitude to it is concerned, he seems to have come to the brink and turned away. He has no evaded himself, but he evades Jesus. (21)

と結んでいる。

同じく Secker 版に対する書評 *The New Statesman and Nation* (1931) は、さらに手酷しい。キリストの聖域に性の問題を持ちこんだ事に対して、

The story possessed the imagination of D.H. Lawrence, whose posthumous novel, *The Man Who Died* (Secker, 21s), is an effort to subdue that figure to his own frantic philosophy.... His greatest error consisted in his belief that sexual experience was, in itself, absolute. It is not untrue to say that for men and women there is no such thing as sexual experience; there is only sexual expression. This Lawrence never realised. He was possessed by the idea that the sexual act in itself has a value, is spiritually and mentally creative just as it is physically ;

whereas the truth is that it is only the symbol of spiritual and mental experience. ⁽²²⁾

と真向から反撃している。

こうして、いわば、正統キリスト教社会から、総反撃を受けるに至った点は何処にあるのか、正統キリスト教信仰と対比させて考察してみるならば、この一度死んで甦った男は、教会で語り伝えられてきた復活の主、イエス・キリストであることは明らかであるが、しかし、早春の朝、早咲の春の花々に囲まれた祭壇に、ハレルヤコーラスで迎える、喜びの復活の主とはあまりに異なっている。

死の世界から目覚めた男の体内には、深い非常に深い吐き気がうずいている。残っているものといったら、ただ完全な幻滅感からくる途方もない空虚と吐気のみである。再び無意識の底に沈み、死の冷やかな虚無に、全てを委ねて眠り続けたい。これこそ、何よりも望ましい状態であった。墓から抜け出た男は、ゴルゴダの丘をひとり歩み、農夫に出会うのだが、彼の口から出た言葉は、
“I am not dead. They took me down too soon. So I have risen up.” ⁽²³⁾ であり、この言葉は、農夫を安心させる為の言葉であったのかはしれないが、この言葉に出会った時、たいていのキリスト教徒は、啞然としてしまうことは確かである。キリストの死は旧約の時代より約束されたものであり、彼がすべての人間の贖いの為、生贄の子羊として十字架にかかったのであり、彼の死なしには、キリスト教は存在しえないのである。そして一度死に甦ったということは、死の世界までも下り、死の世界においても救を成就し、そして、死に打ち勝ったものとして、全人類の救いが成就されるのである。それが、死んだのではなかったということになると……

そして、Madelene (マグダラのマリヤ) に出会った死んだ男は、救世主としての生活は終り、使命が終ったことを宣言する。一度死んで悟ったことは、自分の生涯は、干渉の時代であり、他人を支配し、他人に一樣な生活を強制——愛を強制したものであった。自分は一人の人間をも、心から抱擁したことがなかった。自分は自分の使命において、行き過ぎをしてしまった。つまり自分で受けるよりも、人に与える方が多いという行き過ぎであり、それは血のかような温い肉体には不自然であり、残酷な行為に他ならないというものである。

しかし、聖書が語るイエスは、愛を強制する律法者として存在したのではなく、律法を成就するものとして存在したのである。聖書は次のように述べている。

神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、

彼によって、わたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが、神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛する者たちよ、神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛しあうべきである。⁽²⁴⁾

このように、キリスト教徒の愛の行為は、まず神に愛されているという自らの内に満たされたものがあって、満されているが故に、あふれ出る神への感謝の気持が隣人への愛の行為となってあらわれるのである。

そして、さらにキリスト教徒を驚愕させるのは、第二部において、アイシスの女が、優しく彼の傷口にそして足に香油を塗ってくれている時、死んだ男の口をついて出てきた言葉である。

Suddenly it dawned on him: I asked them all to serve me with the corpse of their love. And in the end I offered them only the corpse of my love. This is my body — take and eat — my corpse — A vivid shame went through him. ‘After all,’ he thought, ‘I wanted them to love with dead bodies. If I had kissed Judas with love, perhaps he would never have kissed me with death. Perhaps he loved me in the flesh, and I willed that he should love me bodilessly, with the corpse of love—’ ⁽²⁵⁾

“Take and eat — my corpse —” という言葉は、ただちに、聖餐式を連想させる言葉である。牧師は聖餐に与かる信徒一人一人に、聖餅、ぶどう酒の杯を配付しながら言う。

「取りて食せよ。これに汝の為に与えたまいしキリストの身体なり。」

「取りて飲めよ。これは汝の罪の為に流し給いし新約の血なり。」

聖餐式は、教会の信仰の中心となっているものである。「聖書事典」によると、

主の聖餐を守ることの意義は、信ずる者にイエスの血によって自分があがなわれたことを想い起させ、自分の救われたことを絶えず感謝して、全世界の救いの日の到来を切に待望させることである。

とある。それを、ロレンスは、愛の屍をしか人に与えることが出来なかったというのである。

さらに、香油を塗り続けてくれる女によって自らが新しい存在になったと感じた時、死んだ男は、

And his death and his passion of sacrifice were all as nothing to him now, he knew only the crouching fullness of the woman there, the soft white rock of life.... 'On this rock I built my life.' The deepfolded, penetrable rock of the living woman. (26)

と叫ぶのである。キリスト教会においては、岩は非常に重要な意味を持っている。イエスは、十字架の死を前にして、ピリポ、カイザリヤ地方に行かれた時、弟子達に「私はだれであるか」という質問をなされた。十二使徒の長老格であるシモン、ペテロはそれに答えて、「あなたこそ生ける神の子キリストです」と告白した。そこでイエスは、

バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこでわたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩のうえにわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。(27)

ペテロとはアラム語で岩をあらわし、このペテロの告白、「あなたこそ生ける神の子キリストです。」の上に新約の教会が、死に打ち勝ち建てられているのである。そしてペテロは初代教会を指導し、ネロ皇帝の時代に逆さ十字架にかけられ殉教の死をとげ、ヴァチカンの丘に葬られたのである。そして、その彼の墓の上に聖ペテロ大聖堂が建てられ、代々ローマ法皇はここに座し、天国のかぎをにぎっているのである。又プロテスタントもペテロ個人ということではなく、ペテロの告白を教会の基としていることには変わりないのである。

こうしてみると、確かに、*The Man who Died* は、正統キリスト教からみれば、あまりに冒瀆的な、異端的な書であることはあきらかである。しかしながら、先に引用した J. M. Murry の言葉にあるように、又 Eugene Goodheart の次の言葉にあるように、

If Lawrence is averse to Christianity, there remains nonetheless his deep attraction to the figure of Christ. Lawrence's Christ retains the chastity, the purity of soul that marks the Christ of the Gospels. (28)

この作品の死んだ男、イエスは、死によって、孤独によって、さらにみがきのかかった、救世主としての高貴さ、高潔さ、尊厳を感じさせ、そしてロレンスの描き方の内には、やさしい愛情がこめられていることは確かである。この作品を通して感じられるのは、農家の裏庭で傷を癒した男が、傷からくる吐き気が新たに胸にこみあげて来るにもかかわらず、医者として、もう一度、汚濁と清純が、いっしょくたに存在し、様々に生の泡が吹く現実のただ中へ、一人の孤独な男として戻っていかうとする時、なおも彼の口について出る言葉、

From what, and to what, could this infinite whirl be saved. (29)

に象徴されるように、ひたすら、この世の救い、現代人の救い、神の復活を求める真摯なロレンスの姿である。先に、正統キリスト教と著しく異なるロレンスのイエスについて述べたが、一つ視点を変えて見ると、それらは全て、愛についてのロレンスの考えが述べられていることは明白である。

Dorothea Krook は彼女の著書 *Three Traditions of Moral Thought* (1959) にて、

The main weakness of Lawrence's story is in his misunderstanding of certain vital aspects of the historic Jesus' character, personality and doctrine, in particular of the gospel of selfless love that Jesus preached. Lawrence fails to distinguish between the selfless love that Jesus preached and its erotic corruption or perversion. (30)

と述べているが、ロレンスは決して、キリストの説く selfless love について誤解をしているとは思えない。先に引用したエッセイ "Books", "On Human Destiny" 等において、彼はキリスト教を高く評価しているのである。が、又同時に、現代キリスト教社会のあり方があまりに、その本質からかけ離れてしまっている事に彼は鋭い批判を向けているのである。*Apocalypse* において、長い歴史の過程の中で、常に教理一点ばりの、しかも常に道徳的な解釈をほどこされ、いつの間にか、その意味が人間によって勝手に固定されてしまった聖書解釈のあ

り方を批判している。Krook も、いみじくも認めているように、現代キリスト教社会においては、キリストの説く愛の本質から離れ、erotic corruption あるいは、perversion な形でしか、愛し得なくなっているという現実を指摘していると見るべきであろう。

死んだ男が、生前の自分を反省するあり方、自分の愛が強制でしかなかったということ、一様に生きるよう干渉したということ、心から一人の人間をも抱擁することなく、愛の屍をもってしか愛することができなかったと反省するのは、歴史に生きる一キリスト教徒の反省をうながすものである。

第二次大戦中、殉教の死をとげたドイツの牧師、Dietrich Bonhoeffer (1906-1945) は、こうしたキリスト教徒のあり方を次のように述べている。

キリスト教共同体よりもキリスト教共同体に関する自分の夢を愛している者は、個人的には、正直で熱心で、また犠牲的であろうとしても、キリスト教共同体の破壊となるのである。

神は、夢想をにくみたまう。というのは、夢想は人を高慢不遜にするからだ。一つの共同体の映像を夢見るものは、その実現を神に、他の人々に、そして自身自身に求める。彼はキリスト者の共同体のなかへ要求をもつ者として入り、自分の律法をうちたて、それによって兄弟と神御自身をさばく。彼は、兄弟仲間の中で、他の人々全部に対して生きた叱責のように冷然と立っている。彼はキリスト教共同体の創始者のように、彼の夢想が、人間をむすびあわせるかのようにふるまう。彼の思いのままにいかないことを、彼は失敗とよぶ。彼の映像が、消滅するところに、彼は共同体がくずおれるのを見る。だから、彼は、第一に、兄弟の非難者となり、次に、神の非難者となり、ついに、自棄的な自己非難者となる。⁽³¹⁾

この夢想する者、すなわち、他人に愛を強制する者、は必然的に、自己の夢、律法の中で生きるがゆえに、現実の世界を本当に見渡すことができず、一人の人間すら心から抱擁することはない。観念の世界、自我意識の域を一步も出ることはないのである。こうして、一人の人間が、自我意識の中で生きる限りにおいては、生きた他者との、血のかよった温い人間同志としての交わりは生まれるすべもない。与えるだけの愛というのは、与える者にとっては甘美な自己満足を感じさせるものであるし、神の前に自己を義とすることに、あくせくする姿ともいえる。与えられるだけの者にとっては、与えられるだけというのは一種の屈辱感を感じさせられるものである。生きた人間同志の出会いがない限り、まさに “the

corpse of love” である。

歴史の教会信仰の内、観念の世界で、肉なる存在を無視して続け、私は他者を愛している、愛さねばならないのだという意志のかたまりとなり、他者との生きた交流すら許そうとしない自己愛の変型と化してしまった固い岩ではなく、やさしい、ふれあいの内に、自然に湧き出ずる、生命あるものの、のびやかな愛、“the soft white rock of life” に、人間の交りの基盤を置くことを、ロレンスは選ぶのである。つまり、男と女の結合、結婚を、人生の基盤とするものである。ロレンスは結婚を sacrament としたカソリック教会を、エッセイ “*À Propos of Lady Chatterley’s Lover*” (1930) において次のように評価している。

And the Church, celibate as its priesthood may be, built as it may be upon the lonely rock of Peter, or of Paul, really rests upon the indissolubility of marriage....

And the first element of union in the Christian world is the marriage tie. The marriage tie, the marriage bond, take it which way you like, is the fundamental connecting link in Christian society....

And the Church created marriage by making it a sacrament, a sacrament of man and woman united in the sex communion, and never to be separated, except by death. And even when separated by death, still not freed from the marriage. Marriage, as far as the individual went, eternal. Marriage, making one complete body out of two incomplete ones, and providing for the complex development of the man’s soul and the woman’s soul in unison, throughout a life-time. Marriage sacred and inviolable, the great way of earthly fulfilment for man and woman, in unison, under the spiritual rule of the Church.⁽³²⁾

又、ロレンスは、この物語執筆中に、*Everyman* (3 October, 1927) に “the Risen Lord” というエッセイを発表している。

教会は、十字架にかけられたイエスについて説くが、それだけでは、キリストの受難の半分しか説いていない。十字架にかけられ、三日目に、肉体としても甦ったイエスの生き方こそ、大切なものであると説いている。

For Resurrection is indeed the consummation of

all the Passion. Not even after Atonement, the being at one with Christ through partaking in His sacrifice, consummates the Passion finally. For even after Atonement men still must live, and must go forward with the vision. After we share in the body of Christ, we rise with Him in the body....

Hitherto He had been a sacred child, a teacher, a messiah, but never a full man. Now, risen from the dead, He rises to be a man on earth, and live His life of the flesh, the great life, among men. This is the image of our inward today. (33)

この物語は、こうした肉体においても復活したイエス・キリストを信仰の場に強く主張しようと描かれたものである。それでは、イエスを一人の人間としてとらえるというのは、完全にキリスト教と相対立するものであろうか。

キリスト教は、初期において、プラント的な、ギリシヤ思想の影響を強く受けている。キリスト教の禁欲倫理は、プラトニズムの霊肉分離の思想を前提としてスタートしたのである。そして19世紀、ピューリタンズムは、極度に、その霊肉分離の思想を押し進めた。人間は霊肉分離の状況の内では真に生き生きと生きることはできない。ロレンスは、この事実を鋭く糾弾し、“to live the great life of the flesh and the soul together” (34) を主張しているといえよう。

1966年、*Radical Theology and the Death of God* という書がアメリカで出版された。現代におけるラディカルなキリスト教神学である。Thomas J. J. Altizer は次のように述べている。

We must realize that the death of God is as historical event, that God has died in our cosmos, in our history, in our *Existenz*.... The God or Logos who exists in an integral and essential relationship with the world is a non-biblical God as Barth so forcefully insists. (35)

という立場に立ち、歴史の中で変型してしまったキリスト教の本質をもう一度見つけ出そうという姿勢がある。そして、「受肉」の意味を次のように語る。

If the Word is to become flesh in our world, it must fully and finally become “flesh”, become profane, and therefore it must negate all those forms of the Incarnation which effected a non-

dialectical compromise between “flesh” and “Spirit”. A Word that truly becomes “flesh” will no longer be “Spirit”, just as a flesh is that is transfigured by “Spirit” will no longer be “flesh”. (36)

こうして、「神の死の神学」とロレンスの考えを対比してみると、その考え方の根本においては本質的な共通点を認めることができる。

Adventure in Consciousness (1964) において、George A Panichas が、次のように指摘するように、

This is not to insinuate, however, that Lawrence is any way underrated the significance of Christ. Rather, it underlines the fact that he believed it was necessary to redefine, to de-mythologize, and then to re-mythologize Christ's place in life, as one American theologian has put it. Hence, he sought to restore to Christ a deeper and more vital power disengaged at last from an “anaemei Christus” in the framework of what he once referred to as the “ghastly sentimentalism that came like leprosy over religion.” (37)

又、Samuel A. Eisenstein が *Boarding the Ship of Death* (1974) で述べているように、

Lawrence is not denying Jesus validity as a Christ savior. He as with Goethe before him, believes that hero who comes to redeem should be a particular man, for the first time, assuming “nothing beforehand.” He argues that an “imitatio Christi” especially for the Christ himself, produce only dogmatic shabby, eternal repetition. If Lawrence's Jesus can pave the way so that every man can be his own guide, then Jesus will have been a more universal savior than the messiah who is almost indistinguishable from Attis and Adonis; he will himself fulfill the radiant promise of freedom and independence. Lawrence's Jesus is most like the Jesus whom Dostoevsky describes in “The Grand Inquisitor” chapter of *The Brothers Karamazov*. (38)

ロレンスの *The Man Who Died* は、以上のことを総合的に考察するならば、決して、キリスト教を否定する、冒瀆する作品ではなく、二十世紀におけるキリストの再生を求めた、真摯な作品と言うことができよう。現

代のキリスト教が、あやまった状況にあるとすれば、そのあやまちを、キリストが身を持って示し、改ためることに、その説得力は、効果を増すのである。それは偉大なる思想家である小説家のみ可能な事であると言うことができよう。

それでは、現代における瀕死のキリスト教は、いかなる形で復活を成し遂げることができるのであろうか。

There was a peasant near Jerusalem who acquired a young gamecock which looked a shabby little thing, but which put on brave feathers as spring advanced, and was resplendent with arched and orange neck by the time the fig trees were letting out leaves from their end-tip. (39)

という書き出しでこの物語は始まる。

Having nowhere to go, he turned from the city that stood on her hills. He slowly followed the road away from the town, past the olives, under which purple anemones were drooping, in the chill of dawn, and rich-green herbage was pressing thick. The world, the same as ever, the natural world, thronging with greenness, a nightingale winsomely, wistfully, coaxingly calling from the bushes beside a runnel of water, in the world, the natural world of morning and evening, forever undying, from which he had died. (40)

墓から抜け出した死んだ男が目にする世界は、ロレンスが Etruria で発見した、pre-Christian world の世界である。

Brute force crushes many plants. Yet the plants rise again. The Pyramids will not last a moment compared with the daisy. And before Buddha or Jesus spoke the nightingale sang, and long after the words of Jesus and Buddha are gone into oblivion the nightingale still will sing. Because it is neither preaching nor teaching nor commanding nor urging. It is singing. And in the beginning was not a Word, but a chirrup. *Etruscan Places* (41)

それは、E. Goodheart が指摘しているように、キリスト教の世界とは異質の世界である。

Pained and disillusioned, the man discovers that the world that he had denied for the illusory glory of eternal life has its own undying glory. *Critics on D. H. Lawrence* (42)

逃げた雄鶏をさがしにきた農夫と出会った死んだ男は、傷つき痛む足をこらえながら、むっつりとおしだまったまま農夫のあとから、オリーブの木々の間を歩いていく。

The man with scarred feet climbed painfully up to the level of the olive garden, and followed the sullen, hurrying peasant across the green wheat among the olive trees. He felt the cool silkiness of the young wheat under his feet that had been dead, and the roughness of its separate life was apparent to him. At the edges of rocks, he saw the silky, silvery-haired buds of the scarlet anemone bending downwards. And they, too, were in another world. In his own world he was alone, utterly alone. These things around him were in a world that had never died. But he himself had died, or had been killed from out of it, and all that remained now was the great void nausea of utter disillusion. (43)

傷だらけの足、その苦痛をこらえて踏みしめる足に、緑の小麦のひやりとする絹のような感触が伝わってくる。十字架の死の意味する観念的な世界の救いよりも、さらに生き生きとした生命あるものの、素晴らしさが、伝わってくる。ロレンスの表現力のうまさは、こうした自然描写のうちに、特にすぐれて発揮される。

庭先で、身を安める死んだ男は、庭の片すみにある緑の焰をあげて芽ぶくいちぢくの新芽に、生命の輝きを渾身にこめた、若いオレンジと黒をした雄鶏に、生命あるものの世界に目を開かれるのである。そして初めて、悟るのである。

Risen from the dead, he had realised at last that the body, too, has its little life, and beyond that, the greater life.... Now he knew that he had risen for the woman, or women, who knew the greater life of the body, not greedy to give, not greedy to take, and with whom he could mingle his body. (44)

この死んだ男が、見出した世界は、人間の観念でと

らえ得る Universe ではなく、あの十字架の死すらも何の影響も与えることのなかった、太古からの激しい生命力の燃えたつ、豊かな自然の生きづく cosmos の世界である。

コスモスの世界は、ロレンスが遠くニューメキシコで体験した太古からの宗教がまだ生きている世界、さらにエトルリアでその体験を深化させ、*Apocalypse* でさらに展開されていった世界である。

ロレンスは、人間が自然の一部であった異教における宇宙をコスモスと呼ぶ。コスモスは、古い光輝あふれる異教世界であり、力と荘厳さで輝いていた、はるかキリスト以前の世界である。コスモスそのものが、広大な生きた一つの身体ともいうべき存在で、人はその一部であった。太陽がその偉大な心臓であり、月は偉大なる輝く神経中枢であり、人間の血液と太陽との間に、人間の神経と月との間には、永遠に渡っていきいきとした交流があった。太陽は荘厳なる実体であり、人は太陽から、力と光輝とを汲み出し、礼讃と感謝をそのお返しとしていた。

古代異教の世界は、全く宗教的であり、それでいて神はなかった。コスモスそれ自らが神であり、聖であり、万物の始源であったので、それを起こすのに神を必要としなかったのである。そして人間は、コスモスと胸と胸とを触れ、コスモスと抱擁しあっていた。人はコスモスの一部として、あたかも空とぶ鳥の群のように堅い肉体的一体感に結ばれ、個人としてはほとんど分離しがたいようなあの古代の部族連帯意識を持って生きていた。人は、理性によるのではなく、いわゆる本能と直感とをもって、じかに到達しうる底知れぬ叡智を持っていた。

しかし、個人は自ら分離を感じはじめ、自我意識に陥ちこみ、やがて垂離感に捉われるに至り、始めて神の概念が生まれてきたのである。そして、イエスの時代に入るころには、人間、特に教育を受けた人間は、すでにコスモスをほとんど失っていた。天界は、運命と宿命のメカニズム、一種の牢獄と化してしまっていた。キリスト教徒は、肉体を全く否定し去ることによって、観念的文明によってこの牢獄を脱出し得たのである。そしてコスモスの代わりに、人は機械的秩序をもつ非生命的な力学的ユニヴァースを持ち出して来たのであった。その結果全てのものは抽象と化し、自らは情動と想像の能力を捨て去り、物事に対する感覚を失い、その代償は倦怠と枯死に他ならなくなってしまう。

太陽は今や、科学的な発光体、燃えているガス状の球体にすぎず、人間との関係は破壊されてしまっている。人間は、コスモスとの生きた感応的交流を失い、不毛なる知識の進歩は、もはや人間の生命とはなり得ない。長期に渡る人間の死が除々に始まり、その過程で人間は科

学を生み、機械を造って来たのである。

新しい時代、キリスト教の時代の始まりは、古い真の異教時代の死と一致した。新しい時代の始まりにあって、キリスト教は、まさに別の新しい光輝を人間に与えようとしてやってきたのではあったが、今やわれわれは、キリスト教的な時代の閉止期にある。

No doubt the death was necessary. It is the long, slow death of society which parallels the quick death of Jesus and the other dying gods. It is death none the less, and will end in the annihilation of the human race as John of Patmos so fervently hoped—unless there is a change, a resurrection, and a return to the cosmos. ⁽⁴⁵⁾

と、ロレンスは *Apocalypse* の中で述べている。

確かに我々は二つの叫びを聞いてしまっている。ティベリウス皇帝の御代に、一せきの船がパクシ群島の近くを通った。その時タムスは、「偉大なるパンの神は死んだ」という叫びを聞いたという。それは異教の神々の死を意味し、キリストの生誕を意味したと言われる。そして19世紀、我々は又もや悲痛な叫びを聞く。「我々が神を殺したのだ——お前達と私が、我々はみな神の殺害者だ。」と Nietzsche は叫ぶのである。我々は二つの死を確かに経験してしまっている。

unless there is a change, a resurrection, and a return to the cosmos

The Man Who Died は、まさに、エジプトの女神アイシスに仕える異教の女を通じての復活、コスモス復帰への物語であるといえよう。

死んだ男の復活は太陽との関係によって語られる。傷ついた体を貧しい農家の中庭に横たえた彼を惹きつけたのは、太陽だけであった。そして太陽と春の微妙な鎮痛作用とが、彼の傷口を癒やしてくれ、あまつさえ、臓腑をつらぬくように、ぽっかりと開いた、幻滅の傷口すら、次第に固まってくる。この太陽は、あきらかにコスモスの太陽である。しかし傷が癒えても、彼の復活が完成したわけではない。彼は一人純粋な孤独の中に閉じこもる。救世主としての自らを見出す時、人間とのかかわりを思う時、新たな吐気が依然、胸にこみあげてくる。農夫の妻の肉体的誘惑も、キリスト教徒のマドレインの誘惑も彼はしりぞける。

レバノンの山のふもとで、水仙の花のように黄と白の

ローブをまとった女神アイシスに仕える女に出あった時も、今だ彼は死の影を背おって生きていた。勝ち誇る死の翼の翳。腹を貫いた死の傷の痛み。やさしい情を人に与えただけなのに、その報酬として彼に与えられた、不当な残虐行為の記憶。

しかし、彼が出会ったアイシスの女こそ、太陽そのものであった。

He was absorbed and enmeshed in new sensations. The woman of Isis was lovely to him, not so much in form as in the wonderful womanly glow of her. Suns beyond suns had dipped her in mysterious fire, the mysterious fire of a potent woman, and to touch her was like touching the sun. Best of all was her tender desire for him, like sunshine, so soft and still.

"She is like sunshine upon me," he said to himself, stretching his limbs. "I have never before stretched my limbs in such sunshine, as her desire for me. The greatest of all gods granted me this."⁽⁴⁵⁾

そして、死の重荷から脱けきれず、絶望的な想いに襲われる彼の傷に、女はやさしく油を塗る。彼の全身には冷たい死の恐怖にかわって、暖かみが次第に広がっていく。彼の命の精髓が流れ去った横腹の傷。その傷を女がその胸にだきしめてくれた時、暗黒のまったき静けさが、死んだ男の魂を支配する。

Then slowly, slowly, in the perfect darkness of his inner man, he felt the stir of something coming. A dawn, a new sun. A new sun was coming up in him, in the perfect inner darkness of himself. He waited for it breathless, quivering with a fearful hope.... "Now I am not myself. I am something new...."⁽⁴⁷⁾

優しいふれ合いのうちに成就する愛の世界は、ロレンスが *Lady Chatterley's Lover* で完成した世界である。*The Man Who Died* と、L.C. は同じ頃書かれた、同じ世界である。

So the days came, and the nights came, and days again, and the contact was perfected and fulfilled. And he said: "I will ask her nothing, not even her name, for a name would set her apart."

And she said to herself: "He is Osiris. I wish to know no more."⁽⁴⁸⁾

この二人の言葉は、*Women in Love* で提起された新しい愛の型、純粋に独立した男と女の星々の均衡の出会いがいに成されたと言って良いだろう。

このようにして、死んだ男は、コスモスの太陽、異教の女によって、自らも太陽となり、彼の復活は成就したのである。そして、又、アイシスの女神に自らの神秘を封じこめて、甦った男、オサイリスを待っていた異教の女も、彼によって、蓮の花のように蕾をひらくことができたのである。こうして、二つの太陽、キリスト教と異教は、お互に全きものとして復活を成就したのである。

しかしながら、死んだ男は、異教の女の情熱によってコスモスへの復帰を成し、新たに全きものとして復活を成就したのではあるけれども、異教化されてしまうことはなかったのである。春がめぐり来て、ふれ合いがしっかりと固められ、お互にその念願を成就した時、男は一人、小舟にのって、再会を約束しながら、女のもとを去っていくのである。アイシスの女のもとにとどまるということは、キリストが異教化されることを意味する。復活したキリストは、彼女のもとを去らなければいけない。死んだ男の出立がほのめかされるのは、二人の念願をお互に成就しあった段階であり、アイシスの女の母親の奸計は、単にそのきっかけになったにすぎない。

先に引用したように、ロレンスは結婚ということを非常に重視している。*Lady Chatterley's Lover* は、決定稿に至るまで三度書き直されているが、初稿と決定稿とをきわだて異なる点は、決定稿においては、あくまで離婚し、正式に結婚する努力がなされる点である。人間としての物語であれば、死んだ男とアイシスの女は、共に末長く暮すことになったであろう。しかし、*The Man Who Died* は、キリスト神話である。死んだ男とアイシスの女は、キリスト教と異教の象徴である。二人が共に生活するという事は、キリスト教と異教が混じりあう事に他ならない。そうであってはならない。混り合いという事をロレンスは非常に危険視している。混り合いの中からは、何も生まれえない。二つの物が、独立して存在し合い、その緊張関係、バランスの内に、初めて成就がある。初期から晩年に至るまでの、ロレンスの一貫した信念であった。

ロレンス最後の短編集 *The Lovely Lady* (1933) に収められた "*The Overtone*" という作品に、*The Man Who Died* における、キリストの復活は、異教化されるのではなく、キリスト教も異教も全きものとして、お互に独立し、関係を保ちながら存在することに意味があ

るという事実を別の角度から見てとることができる。

“But I am a nymph and a woman, and Pan is for me, and Christ is for me.

“For Christ I cover myself in my robe, and weep, and vow my vow of honesty.

“For Pan I throw my coverings down and run headlong through the leaves, because of the joy of running.

“And Pan will give me my children and joy, and Christ will give me my pride.

“And Pan will give me my man, and Christ my husband.

“To Pan I am nymph, to Christ I am woman.

“And Pan is in the darkness, and Christ in the pale light.

“And night shall never be day, and day shall never be night.

“But side by side they shall go, day and night, night and day, for ever apart, for ever together.

“Pan and Christ, Christ and Pan.

“Both moving over me, so when in the sunshine I go in my robes among my neighbours, I am a Christian. But when I run robeless through the dark-scented woods alone, I am Pan’s nymph.”⁽⁴⁹⁾

キリストとパンの神は、二者択一の実在ではなく、両者があって、つまり昼と夜があって一日となるように、初めて、人間は、一個の完全な存在となりうるのである。キリストを精神、パンの神を肉体の象徴としてとらえることができる。*The Man Who Died* においても、キリストとアイシスの女、二人が全きものとして、独立して復活することが必要であったのである。

前出のアメリカの神の死の神学も、こうしたオリエントの異教の神との接触の必要性を次のように述べている。

From the East we may once more learn the meaning of the sacred, not because the sacred has never been present in Christianity, but because Christianity in our time is in a process of dissolution and transformation. Furthermore we can encounter in the East a form of the sacred which Christianity never known, a form which is increasingly showing itself to be relevant to our situation. Again by opening ourselves to the radically profane form of contemporary *Existenz*,

we can prepare ourselves from a new reality of the Incarnation, as Incarnation that will unite the radical sacred and the radical profane, an Incarnation that will be an ultimate *coincidenentia oppositorum*. Let the Christian rejoice that of *Existenz*. A profane destiny may yet provide a way to return to the God who is all in all, not by returning to a moment of the past, but meeting an epiphany of the past in the present.⁽⁵⁰⁾

The Man Who Died は、この Altizer の言葉を先取りしていたと言えないだろうか。

ロレンスは、敬虔なキリスト教徒として生まれ育ち、霊の圧倒的支配のもとに苦しむことから、その人生をスタートした。そして長いことキリスト教を否定しつつも、人間に本当の活力を与える神に出会えず、世界を放浪して回り、ニューメキシコに、初めてその出会いを経験し、エトルリアでさらにその確証を深め、キリスト教世界よりも、はるかに歴史を逆上り、古代異教世界、コスモスの世界を発見、確立した。死を前にした彼は、コスモス回帰により、新たに霊肉調和して復活したキリスト、現代人の救い、を書いたのである。正統キリスト教のキリストとは異なるが、彼のキリストは、彼の生涯と密接にかかわりあって、そして確かに復活したのである。神の不在、神の死の言われる時代において、神の復活を描きうるというだけでも偉大な小説家であり、予言者であったとすることができるであろう。

死の数カ月前、彼は友人 E. Bruster に語ったという。

Lawrence’s conversations during his last months interested me more than ever; in one of the first he said to me; “I intend to find God. I wish to realize my relation with Him. I do not any longer object to the word God. My attitude regarding this has changed. I must establish a conscious relation with God.” These remarks surprised me, remembering how previously he had declared to my Brahmin friend (Dhan Gspal Mukerji) that “God is an exhausted concept.”⁽⁵¹⁾

今や、静かに平安のうちに、死の舟の準備をしているロレンスの姿を見る。

Oh build your ship of death, oh build!
for you will need it.

For the voyage of oblivion awaits you.

“The Ship of Death”⁽⁵²⁾

NOTES

- 1) Harry T. Moore, *The Life and Work of D. H. Lawrence* (London, 1963), p. 22.
- 2) *ibid.*, p. 22.
- 3) D. H. Lawrence, "Hymns in a Man's Life", *Phoenix II* (London, 1968)
- 4) D. H. Lawrence, *Collected Letters of D. H. Lawrence* (London, 1970), p. 273.
- 5) *ibid.*, p. 76.
- 6) Margaret A. Murray, *The God of the Witches* (London, 1970), p. 14.
- 7) *ed. cit.*, p. 180.
- 8) D. H. Lawrence, *Women in Love* (London, 1966), p. 122.
- 9) *ed. cit.*, p. 687.
- 10) D. H. Lawrence, "Books", *Phoenix* (London, 1967), p. 734.
- 11) D. H. Lawrence, "On Human Destiny", *Phoenix II* (London, 1968), pp. 627-628.
- 12) *ed. cit.*, p. 668.
- 13) Frank Kermode, *Lawrence* (Collins, 1973), p. 117.
- 14) Edward Nehls, ed., *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, vol. 3 (Madison, 1958), p. 136.
- 15) Warren Roberts, *A Bibliography of D. H. Lawrence* (London, 1963), pp. 123-125.
- 16) D. H. Lawrence, "The Man Who Died", *The Short Novels*, vol. 2 (London, 1968), p. 16.
- 17) *ibid.*, p. 41.
- 18) *ibid.*, p. 47.
- 19) Edward Nehls, ed., *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, vol. 3 (Madison, 1958), p. 206.
- 20) J. Middleton Murry, *The Criterion* (London, 1930), pp. 184-187.
- 21) "The Man Who Died", *Time Literary Supplement* (London, 1931), p. 267.
- 22) Richard Sunne, "Current Literature, Books in General", *The New Statesman and Nation* (London, 1931), p. 187.
- 23) *ed. cit.*, p. 7.
- 24) 「新約聖書」(東京, 1962), p. 380.
- 25) *ed. cit.*, p. 41.
- 26) *ed. cit.*, pp. 42-43.
- 27) 「新約聖書」(東京, 1962), p. 26.
- 28) Eugene Goodheart, "The Man Who Died", *Critics on D. H. Lawrence* (London, 1976), pp. 110-111.
- 29) *ed. cit.*, p. 22.
- 30) Dorothea Krook, *Three Traditions of Moral Thought* (London, 1959), p. 283.
- 31) 岸千年訳「交わりの生活」(東京, 1965) pp. 15-16.
- 32) D. H. Lawrence, 'A Propos of *Lady Chatterley's Lover*' and Other Essays (Harmondsworth, 1967), pp. 106-107.
- 33) D. H. Lawrence, "The Risen Lord", *Phoenix II* (London, 1968), pp. 574-575.
- 34) *ibid.*, p. 574.
- 35) J. J. Altizer and William Hamilton, *Radical Theology and the Death of God* (New York, 1966), p. 11.
- 36) *ibid.*, pp. 20-21.
- 37) George A. Panichas, *Adventure in Consciousness* (London, 1964), pp. 124-125.
- 38) Samuel A. Eisenstein, *Boarding the Ship of Death* (Mouton, 1974), pp. 130-131.
- 39) *ed. cit.*, p. 1.
- 40) *ed. cit.*, p. 6.
- 41) D. H. Lawrence, *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (Harmondsworth, 1967), p. 126.
- 42) *ed. cit.*, p. 109.
- 43) *ed. cit.*, p. 8.
- 44) *ed. cit.*, p. 16.
- 45) D. H. Lawrence, *Apocalypse* (Harmondsworth, 1974), p. 31.
- 46) *ed. cit.*, p. 38.
- 47) *ed. cit.*, p. 42.
- 48) *ed. cit.*, p. 44.
- 49) D. H. Lawrence, "Overtone", *The Complete Short Stories* (New York, 1968), p. 759.
- 50) *ed. cit.*, pp. 18-19.
- 51) Edward Nehls, ed., *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, vol. 3 (Madison, 1958), p. 405.
- 52) D. H. Lawrence, *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, vol. 2 (London, 1972), p. 720.

BIBLIOGRAPHY

List of Works Consulted

1. Texts written by D. H. Lawrence :
 - a) Novels :
 - Lady Chatterley's Lover*. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1968.
 - The Plumed Serpent*. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1968.

- The Rainbow*. London : William Heinemann Ltd., 1968.
- Sons and Lovers*. London : William Heinemann Ltd., 1965.
- Women in Love*. London : William Heinemann Ltd., 1966.
- b) Short novels :
The Short Novels of D. H. Lawrence, Two vols. London : William Heinemann Ltd., 1968.
- c) Short stories :
The Complete Short Stories of D. H. Lawrence, two vols. New York : Viking Press, 1968.
- d) Poems :
The Complete Poems of D. H. Lawrence, two vols., Collected and edited by Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. London : William Heinemann Ltd., 1972.
- e) Travelogues :
Morning in Mexico and Etruscan Places. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1967.
Twilight in Italy. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1969.
- f) Essays :
Apocalypse. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1974.
'Á Propos of Lady Chatterley's Lover' and Other Essays. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1967.
Phoenix. London : William Heinemann Ltd., 1967.
Phoenix II. London : William Heinemann Ltd., 1968.
- g) Letters :
The Collected Letters of D. H. Lawrence, two vols., ed. by Harry T. Moore. London : William Heinemann Ltd., 1970.
2. References :
- a) Books in English :
Altizer, J. J. and William Hamilton. *Radical Theology and the Death of God*. New York : Bobbs-Merrill Company Inc., 1966.
Andrews, W. T. ed., *Critics on D. H. Lawrence*. London : George Allen and Unwin Ltd., 1971.
Eisenstein, Samuel A.. *Bording the Ship of Death*. Paris : Mouton & Co., 1974.
Kermode, Frank. *Lawrence*. Collins : Fontana, 1973.
- Krook, Dorthea. *Three Traditions on Moral Thought*. London : Cambridge University Press, 1959.
- Moore, Harry T.. *The Life and Work of D. H. Lawrence*. London : George Allen and Unwin Ltd., 1963.
- Murray, Margaret A.. *The God of the Witches*. London : Oxford University Press, 1970.
- Nehls, Edward. *D. H. Lawrence : A Composite Biography*, three vols. Madison : The University of Wisconsin Press, 1958.
- Panichas, George A.. *Adventure in Consciousness*, London : Mouton & Co., 1964.
- Roberts, Warren. *A Bibliography of D. H. Lawrence*. London : Rupert Hart-Davis, 1963.
- b) Magazines :
The Criterion. October 1930. Vol. X, No. XXXVIII
The New Statesman and Nation. March 28, 1931. Vol. I No. 5
Time Literary Supplement. April 2, 1931. No. 1522
- c) 和書 :
岸千年訳『交わりの生活』 東京 : 聖文社, 1965.
『聖書』 東京 : 日本聖書協会, 1962.
桑田秀延他監修『聖書事典』東京 : 日本基督教団出版部, 1961.

ABSTRACT

Kiyomi Abe

David Herbert Richard Lawrence (1885-1930) wrote the most beautiful and sensitive story towards the end of his life. *The Man Who Died* (1928) is a parable of Jesus Christ, though his name is never mentioned in the story. It was necessary for Lawrence to write about the Resurrection of Jesus before his death.

He was brought up as a Christian, but suffered the conflict between flesh and spirit when he was young, as Christianity was too spiritual in those days. Also for him, all churches in Europe were dying as Nietzsche had declared. Christianity was really great in the Middle Ages but it can never save the men in the 20th century. Lawrence sought for living God all over the world through his life. For him, religion must be an experience, an uncontrollable sensual experience, deep down in the senses, inexplicable and inscrutable. He said,

“...primarily I am a passionately religious man, and my novels must be written from the depth of my religious experience.” He wrote great many novels, short stories, poems, essays and travelogues.

He was much influenced by the spirits of the place. He found the remains of great paganism in Italy when he and Frieda visited there, running away from England. In February 1922, after the First World War, he left Europe. Passing Ceylon and Australia, he arrived in New Mexico in September. It was New Mexico that he got a sense of living religion from the Red Indian. It seemed to him that the Red Indian was a remnant of the most deeply religious race still living. Their religion was a vast, old, pure and greatly cosmic one not broken up into specific gods or saviors or systems. In the oldest religion, everything was alive, not supernaturally but naturally alive. The whole life-effort of man was to get his life into contact with the eternal life of the cosmos.

He wrote *The Plumed Serpent* in Mexico. He denied Christ and tried to call back the old Mexican god, Quetzalcoatl. But he failed.

He came back to Europe in 1925, as he was sentenced to death by a tuberculosis. The doctor told him he could live only one or two years. He settled in Italy and visited Etruria with his friend, Earl Bruster. There he met pre-Christian Europe. He saw in the Etruscan the same thing that he had seen in the Red Indian, and old pagan religion was figured forth within himself. He was struck to write *The Man Who Died* when he passed a little shop at Grosseto with Earl Bruster and he saw a white toy rooster escaping from an egg in the shop window on the Easter morning.

When the book was published, it is resented

by many Christians as an outrage and a blasphemy. Because, the man who died, Jesus, denied his life as a savior. He said he had swayed and interfered people. He had never truly embraced even one. He had offered them only the corpse of his love.

This doesn't mean that Lawrence denied Christ by himself, who preached selfless love. He accused men in the historic church who could not love each other truly, but with the love only as corruption or perversion of love. Jesus is the founder of the Christian church, so he is responsible for the historic church as well. Lawrence believed that it was necessary to de-mythologize first, and then to re-mythologize Christ in our life as a whole man. Now our historic church is dying.

How can He resurrect again, then? Back from death, the man who died found the natural world, a cosmic world, which is forever undying. The sun and subtle salve of spring healed his wounds. He was still under the shadow of grey, grisly wing of death triumphant, when he met a virgin priestess of Isis in Lebanon. And she was the sun itself. The sun in the story is not the sun in the universe but in the cosmos of great paganism. The priestess annointed him, and she expelled the death and awoke life by her tender touch and desire in him. He was resurrected as the new sun, a whole man, and as the pagan priestess as well. Christ was resurrected through the passionate fire of paganism, but never was paganized. After they were consummated, he sailed out.

Lawrence thought we need both Christ spirit and a pagan god, and flesh. On the balance of them, we can be whole. The American radical theologians now stand on the same thought.

In our day, only great novelist can write the story of resurrected God. Lawrence is really a great novelist and a prophet.